

新聞短歌から見る東日本大震災

小田島 夕花

東日本大震災から7年が経ち、この間に震災に関する様々な文学作品が発表されてきた。歌人も作品を発表し、その批評・分析もなされてきたが、有名歌人以外の被災者による短歌を対象とした批評・分析はほぼなされていない。特に岩手県で詠まれた作品は未整理のままである。そこで、本研究では、被災県のひとつである岩手県で発行されている新聞に投稿された短歌(以下「新聞短歌」とする)を収集・整理し、その表現について分析する。

研究方法は(1)新聞短歌の収集・整理・分析と(2)文献調査の2つとした。

新聞短歌の収集・整理・分析では、次の5点が明らかになった。1つ目に、震災詠の掲載される割合が、2011年は震災直後の4月から徐々に減り、12月に再び増加した。2014年、2017年は5月に震災詠の割合が高くなる傾向が見られた。2つ目に、投稿者の地域分布について、2011年9月までは沿岸部以外からの投稿が多かったが、その後は地域による掲載数は差が少なくなることがわかった。3つ目に、震災詠に感情語が含まれる割合について、震災以前の作品、震災詠、非震災詠のいずれも感情語が含まれる割合が10パーセント以下であり、もともと感情語を詠みこむことは好まれていないことがわかった。また、震災詠として明るい気持ちを詠むことは自らの体験を題材にしたもの以外は不謹慎とされ、詠まれないという背景が推察できた。4つ目に、震災詠の題材になる地名やものについて、震災以前から固有名詞を詠みこむことは好まれていないことがわかった。5つ目に、震災語が含まれる作品と含まれない作品の違いについて、震災語を詠みこむ詠み方が好まれていること、沿岸部の津波による被害に関する震災語が多く使われていること、使われる震災語は徐々に種類が減っていくことがわかった。また、表現の違いについては、描写の具体性に影響があるのは震災後の有無ではなく詠む際の視点の違いである可能性が示された。

文献調査では、次の2点が明らかになった。1つ目に、沿岸部以外の地域から「被災地が立ち直る」という意味を含む震災語が2017年には1首もみられなくなった背景を探るため、沿岸部からの投稿作品と復興の様子に関する報道を調査した結果、沿岸部とその他地域では沿岸部の復興に対する認識にずれがあり、沿岸部からの作品や報道から沿岸部の当事者の声を受け、その他地域において「被災地が復興した」という内容の作品は詠まれなくなっていった可能性が浮かび上がった。2つ目に、短歌のみでは背景すべてを描写できておらず、非震災詠に見えても実は震災詠であったものがある可能性があることがわかった。

今後は形態素解析による内容解析や、他の地域で起こった災害の後に被災地域で詠まれた短歌に関しても同じ傾向が見られるかの調査などが求められる。

(指導教員 綿抜豊昭)